

近世節用集の序・跋・凡例

——早引節用集——

高 梨 信 博

はじめに

筆者は、近世節用集を概観する一つの手がかりとして、さきに近世節用集に付された序文や跋文や凡例等を翻刻し、若干の注記を加えて発表した（近世節用集の序・跋・凡例 一―五）、^①「国語学 研究と資料」十一―十五号）。そこでは、近世節用集の展開のあとをたどるために、刊行年または成立年の順に通観することとしたのであるが、性格をことにするとところの大きい早引節用集については別にまとめて扱うこととして除外していた。本稿では、早引節用集に添えられた序・跋・凡例等を翻刻して、早引節用集がどのような姿勢のもとに編纂されているかをうかがうための資料としたい。

翻刻に関しては以下の方針によるものとする。

① 排列は刊行年の順とする。

② 書名のあとに翻刻の底本に用いた伝本の所蔵機関を示した。

ただし、筆者所蔵のものをを用いたばあいは、これを省略する。

③ 漢字の字体は、「常用漢字表」に含まれるものはその字体とし、それ以外は正体に統一する。

④ 原文に句読点があるばあいはそれによるが、ないばあいは句点をおぎなう。なお、原文の記号のいかんにかかわらず、句点はへ、ゝ、読点は、へ、ゝに統一する。

⑤ 漢文などに用いられている熟字符は省略する。

⑥ 翻刻上の便宜のため、原文で双行の箇所を一行に改めたばあいはある。

⑦ 一書に二つ以上の序・跋・凡例等があるばあいは、翻刻ではそのあいだに一行分のあきをおく。

⑧ 翻刻のあとの注記は簡略なものにとどめる。

早引節用集

近世節用集は、いわゆる古本節用集をうけて、仮名見出しの頭字のいろは分けと意義分類を組みあわせた部門引きと呼ばれる検索法

をもって出された。宝暦二年（一七五二）刊の『新撰早引節用集』は、意義分類のかわりに仮名見出しの字数を項目分類の基準として取り入れた。仮名見出しの頭字のいろは分けと仮名見出しの字数とによるこの項目検索法は「早引」とよばれ、近世後期には節用集の流布のなかで早引節用集が大きな位置をしめることとなった。

近世に編纂、刊行された節用集のうち、現在、伝本の存在を確認できるものは、約二百六十点であるが、このうち早引節用集は約五十点である。早引節用集以外の近世節用集では、序・跋・凡例等をとまなうものは全体の三分の一ほどであるのに対し、早引節用集では約三分の二に序・跋・凡例等が付されている。ただ、早引節用集の序文等のなかには、それぞれの早引節用集の内容や編纂方針を知ろうと実質的にはあまり参考にならない形式的なものもあり、また幕末に近くなると、先行の早引節用集の序文等をほとんどそのまま踏襲しているものもみられる。特に、項目の検索法をしるした「文字引様」とよばれる記事と、仮名づかいがわからないときには可能性のある箇所を広くたずねるべきことを述べた記事は、多くの早引節用集にはほぼ同内容のものがのせられている。

実質的な内容のよしさや類似の内容のくりかえしという、そうしたことが自体、早引節用集の序・跋・凡例等の実際であり、それを明示するためにはすべての序・跋・凡例等を省略なしにあげるべきであるが、本稿では紙数の制限の範囲内で、必要と判断したものを選んだ。

1 宝暦早引節用集 宝暦二年（一七五二）刊 東京学芸大学附属図書館（望月文庫）

序

載^チ輸^ノ爾^ノ載^ノ將^ヲ伯^ヨ助^ト予^ヲ。是以^レ商^ノ諭^ノ國^ヲ言^フ則^チ敬^ニ事^ニ節^ニ用^ニ之^ヲ語^ヲ何^ヲ以^テ取^リ之^ヲ非^ラ類^ニ乎^ニ。不^レ然^ニ誰^カ家^ニ畜^ヘ人^ヲ懷^ニ享^ニ。拱^ニ壁^ニ。邪^ニ刻^ス者^ト寔^ニ蕃^ニ有^ニ徒^ニ。而^{シテ}今^ニ去^リ繁^ヲ就^ニ簡^ニ以^テ音^ヲ呼^フ字^ヲ。嚮^ニ応^ニ影^ニ写^ニ乃^チ成^ニ功^ニ倍^ニ于^ニ前^ニ。幼^ニ童^ニ士^ニ正^ニ名^ヲ而^{シテ}後^ニ自^ニ憐^ニ。則^チ節^ニ用^ニ之^ヲ語^ヲ万^ニ分^ニ於^ニ有^ニ政^ニ。可^レ謂^フ取^リ喻^ヲ有^ニ挹^ニ哉^ニ。以^テ為^ニ小^ニ引^ニ。

壬申之秋 挹梧散人題印

凡例

一世^ニ有^ニル^ニトコロノ節^ヲ用^ハ乾^ヲ坤^ヲ門^ノ言^ヲ語^ヲ門^ノ等^ノ部^ヲ分^ヲ十^ニ三^ニ門^ニ或^ハヒ八^ニ十五^ニ門^ニニヨリテ字^ヲ搜^ル。然^{レト}モ部^ノ門^ノ繁^キニヨリテ却^テ混^ニ雜^ニノ事^多シ。

一此^ノ節^ヲ用^ハ部^ノ門^ニニヨラズ訓^ヲ読^ニノ仮^ナ名^ノ数^ヲ以^テ文^ヲ字^ヲ求^ム。急^ニ時^ノ便^ナル。他^ニ異^ナリ文^ヲ字^ヲ引^キ様^ニ次^ニニ図^ス。

一此^ノ編^ヲ専^ニラ要^ニ用^ノ字^ヲ増^ニ益^シ字^ヲ画^ヲ音^ヲ訓^ノ誤^ヲ正^ス。

文字引様

一伊^イ。意^イ。猪^イ。訓^ヨ読^コ一^ホ声^シの分^フ此^コ部^ニに入^ル。

二池。色。伊勢。二声の分此部に入ル。

三祝。医者。煎海鼠。三声の分此部二入ル。

四論談。六波羅。四声の分此部二入ル。

余は之に准へ訓読の数を以てくり出す。

現在、知られている範囲で、最初の早引節用集である。寛延三年（一七五〇）刊の『蠡海節用集』を改編したものと考えられる（拙稿『早引節用集の成立』、『国文学研究』百十三集）。本書の改題本の一つで、『文化己巳秋訂正再刊』（文化六年）の刊記をもつ『増訂早引節用集』には、『正徳乙未春 原刊』（正徳五年）とあるが、宝暦二年以前の早引節用集は確認されていない。

〈凡例〉に述べられているように、『混雑』の多い意味分類（門）を廃し、仮名見出しの字数によって項目を求めることにより『急時ノ便』となるのが早引節用集の長所とされる点であった。この仮名見出しの字数という項目検索のための新たな基準を具体的に示すために『文字引様』が添えられている。早引節用集の多くにはほぼ同内容の『文字引様』がみられることは、先にしるした通りである。

本書は、同じ書型（小本）で、内容もほぼ同一のまま、宝暦七年（一七五七）刊の『増補改正早引節用集』に引きつがれ、以後、版を重ねていく。その間、序や凡例もほぼ同文であるが、文化十一年（一八一四）版（六行本）では、序文の筆者は十拙散人

とされ、その内容も別になっている。

2 増字 百倍早引節用集 宝暦一〇（一七六〇）刊

序

成語者古語也。以古人之語達今人之情。書同レ之。施之四方。無所不至。唯文徳歟。舟車所通。霜露所隊。親レ文知意。其是已。此集一出。因声取字。若鏡中影。被褐懷玉。比之夜光之宝。宜哉。前刻已行于世。今新旁加三真字。伝之永年。因亦弁序其端。記歳月云。

庚辰春三月穀旦

捩梧散人印

凡例

一 此書ハ他ノ節用トカハリ、門部ニヨラズ、訓読ノ仮名数ヲ以テ、文字ヲ求ム。シカラシムルモノハ、門部混雑ノ惑ナクシテ、急時搜索ノ便ナラシメント欲シテナリ。依レ之題シテ、早引節用集ト云フ。

一 原板ノ早引節用既ニ世ニ行ハル。今新 数千字ヲ増益シ、傍真字ヲ附シテ、以テ日用ノ弁ニソナフ。

音かなづかひの取違やすき字大略をしるす。

光くわうこう 香かう 蠟ろう 蠟ろう 相さう 統とう 簪ほうき 石じくろ
 此類は両方を見るべし。

1 にあげた『宝暦早引節用集』とこれをうけた『増補早引節用集』の漢字見出しが行書体のみであるのに対し、楷書体を添えて真草二行の形式にしている。項目も、多くはないが増補されている。『増補早引節用集』とともに幕末にかけて多くの版がみられ、流布の広さをうかがうことができる。

1 と同じ趣旨の『もんじひきやう文字引様』があるが、省略した。仮名づかいに関する注記は、項目の検索にあたつて仮名見出しの頭字や字数について、可能性のある箇所を広くさぐるべきことを述べたものである。早引節用集の項目検索は、語形による検索法という性格が強いだけに、こうした注記が必要になったものと思われる。何らかの標準的な仮名づかいを設定し、それにのっとることを利用者に求めるということをしていない点にも注意すべきであろう。

3 大全早引節用集 寛政八年（一七九六）刊

凡例

一 此書コノシヨノ引ヒキヤウハ門部カドニ就モトテ求モトメズ。音訓ヨミコトノ仮名数カナカズニ随シタガヒテ文字フシジヲ得エル。其例次シズメニ挙キタリ。

一 原板ゲンパン早引節用集セイインセツヨウシヨ世ヨニ行ユクハレテ尚増補ナガシメノ集シツアリ。然ルニ今人家日用イマジンシカニチヨウノ俗語及ゾクゴヨビ經史尺牘ケイシセキトクノ熟字ジュクジニ至ルマデ出所シュツショ儘ナルヲ撰センテ音訓オンコトヲ正タシシテ広大増益クワウダイゾウエキス。於是コノニラヒテ雅俗ガク要用ヨウヨウノ文字モンジヲ不洩モウサズシテ索閱サクオンノ捷ハヤキカイイコノシヨ海内此書カイイコノシヨヨリ便ナルベンナカランノミ。

『もんじひきやう文字引様』は省略する。

宝暦七年（一七五七）刊の『増補早引節用集』と宝暦一〇年（一七六〇）刊の『増字早引節用集』はともに版をかさね、他に類書のないなかで、早引節用集の流布を進めた。明和八年（一七七二）に『新編早引大節用集』、天明五年（一七八五）に『早引残字節用集』が刊行されたが、広く普及するには至らなかった。

『増補早引節用集』は、凡例にあるとおり、項目が大はばに増補されており、『増補早引節用集』や『増字早引節用集』の倍ちかい項目数となっている。項目の増補された早引節用集のうちの中心的なものとして、改題本を含めて、本書は江戸時代後期に広く利用されることとなった。

4 万倍マンバイ偶奇仮名引節用集 文化元年（一八〇四）刊

偶奇仮名引節用集序

自伏羲氏之始画八卦造書契。而下後世雜書復無不繇生焉。今斯集也、

雖不雅乎、俗間日所言所行、出于千百。苟可識文字、乃配之、分奇偶之言。当今有大被行節用、人称之。然而自不知其可也。何則、和訓意字、謂之古許婆也誤也。其也字者、世也。焉知烏之雌雄。其他漢吳胡清音訛差、八千有余使人蚩惑焉。覽者用斯集而知日顧其所言所行文字配当如何焉。則万事足于斯奇偶節用集云爾。

癸亥仲冬

田仲宣題

凡例

素問、曰人の眼耳鼻は左に利き、手足は右に利とぞ。是天の常理なり。今此節用集は、先此理を考得て、竺土の貝葉原本の蟹字法に倣て、右より左に横に見る事を格とす。実に、本朝におゐて例なき活法なり。殊に文字の偶奇と、数とを分たれば、世上に流布せる、尋常の節用集とは天壤の差なること左の引例を見て察給ふべし。

入用文字頓引 出様(省略)

庄也 庄は平なり。しやうの声なし。

庄 莊

然とも、草書体は書家者流より、誤を伝へて終に本を失す。故に草字の傍に、真字を附して是を祐く。然とも草書は篆書より出し物也。真字は隸書より出し物なれば、必真字の例を以、草字を猥に押べからず。唯正字の法則とするのみ。初学の兒女子心得給ふべきなり。

たとへば 坪 坪 牖 牖 如斯 誤り伝へしを正しうせ

坪正字 坪誤字マト正字 誤字

ん為、真字を附せし也。既に世に行はる、節用集の内小刻一冊の中に八千余字誤字あり。亦甚敷からずや。依て此書は数廻校正して是を上木す。

一、如斯 圈点を付し方は音なり。の無は訓なりと察給ふべし。音とは往古の唐音なり訓とは音訓とも清濁を以義理体用を分なり。然共東山神代よりの本朝の言葉なり。音訓とも清濁を以義理体用を分なり。西海の分ちにてたとへは、こそばひをくすくつたい、むづかしひをむづかしひと清濁の齟齬あり。依て畿内の平声を以清濁を分なり。万邦の士庶是を弁 察給ふべし。

湯桶 重箱 音訓混雜の熟字あり。上のごときはゆとう読と云、下の如きをぢうば読とていやしむ。乍併 多年用ひ来るは、今更いかんともすることなし。達て改るときは事を妨ぐ。是角を撓て牛を殺すに等し。然とも字を糺す書なれば、悉 圈点を以図のごとく音訓を分つ。

△新在家文字 新在家文字といふは本朝中古より連歌者流の用ひ

▲本朝制作文字 本朝制作文字を見るに、元の世までは、往古より正字

通字俗字とて有しを、明に至て是を改たり。通字俗字を陋は洪武正韻已後の字書而已見て古しへに罔しといふべし。本朝の人として本朝制作の字を俗字と賤しむは己が親を不敬して他の父母に孝を尽すに等し。況 草野民に於をや。筆を力と諛梯をテイと諛の類は一

向論なし。

都て罫の中に一字宛門部を略して附すもの繁多を厭ひて省略す。門部を碎さて附すは文字の求易き為にてたとへば 掃庭 佩太刀 履

香^か 吐^{はく}口^く 箔^{はく}金^{きん}銀^{ぎん} 白^{はく}色^{しき}
 草履^{くわん} 品^{ひん}類^{るい} 体^{たい}用^{よう}の分^{ぶん}やすき^や為^な也^{なり}。故^{ゆゑ}に原^{げん}本^{ぽん}の十^{じゅう}三^{さん}門^{もん}部^ぶに不^ふ限^{げん}繁^{はん}多^たなる故^{ゆゑ}一^{いち}字^しを以^{もつ}て分^{わか}つ。

書名の「偶奇」は、内題では「てうはん」と振り仮名がある（なお、伝本によつては、この内題が「長半」と改刻されている）。

紙面を六段にわけ、上の三段を「偶之部」、下の三段を「奇之部」とし、それぞれ、仮名見出しの字数の偶数、奇数によつて項目を収めている。偶奇それぞれのなかで、さらに字数によつて順次、項目を分類しており、節用集のなかでの区分としては早引節用集の一種と見なしてよいものである。

仮名見出しの字数の偶奇によつて項目を大きく二分したものである。明和八年（一七七二）刊の「^{明和}新^新撰^撰好^好文^文節^節用^用集^集」があり、本書はそれを参考にしたものであろう。ただ、「^{明和}新^新撰^撰好^好文^文節^節用^用集^集」は、基本的には部門引きの節用集であり、そのなかでの下位分類として仮名見出しの字数の偶奇を取り入れているのに対し、本書は、基本的に早引節用集であるなかで、仮名見出しの字数の偶奇によつて項目を分けている。実際上は、一紙を六段に分け、各段に仮名見出しの字数ごとに項目を配しており、偶奇という二分は、項目検索のうえで実質的には大きな意味をもちえていない。仮名見出しの字数の同じ項目を横列に配している（凡例第一項で「蟹字法」に効て、右より左に横に見

る」と述べられている）のも、実際の検索においては、繰るべき紙数を多くしたのみで、実用性からはむしろ不便であつたろう。

編者の田宮橋庵は大阪の儒者で、本書のあと、文化三年（一八〇六）刊の「^{万葉}万^万家^家字^字引^引大^大全^全」を編纂している。凡例の内容には共通するところもあり、あわせて検討する必要がある。

なお、ろ部のはじめに次の記載がある。参考として引用する。へいろは四十七字の内らりるれろ此五文字の音は日本の和訓無字なり。故に節用集にもらりるれろの文字は少し。勿論万葉集日本記古事記等にも此かなの頭に付訓なし。〜

5 世用^{世用}早^早引^引大^大節^節用^用集^集 文化六年（一八〇九）序

僕一介の細微、いさ、か毛錘に馮て口を糊す。幸に同僚諸君の尊委を承て令郎令愛を付托せられ拙技を將て学しめよと也。僕此重任に当すといえ共固辞ときは誇に近く、仮に師徒の名声を称す。戦哉栗哉。近頃小冊を疊て俗間に縦横する世話の文字を書集め、之を授て以て積塵為山の功を見とするに、徒弟纔に一百余個の小夥兒なれ共、伝伝写写して魚を魯とし、ぬをねとし、算不得。一言衆盲を引の誹を受に至こと、倒も亦借むへし。爰に於て木に上せ、早引大節用と標して各自に一帙を与ふ。抑にして蒙を啓に堪たれとも、復大に浅劣を愧のみ。嗚呼奈何かせん満皮の紅なるを

夫

文化己巳王正上浣

橘高峙識

凡例

一 此書引ヤウハ音と訓トノ仮名ノ数ニヨツテ探ヌベシ。仮令ハ（省略）。

一 左ノ傍ニ字毎真字ヲ付ク。但シ一行ニ同字ハ省之。

一 音ト訓トノ分チ易カラシメニ音ハ必 文字ノ傍ニ付ク。訓ハ文字ノ下ニ付ク。仮令ハ

意・為
意ヲモフ為スル
威勢
威ヲスル勢ホヒキ

此ハ本文音ナルユヘ真字ノ下ニ訓ヲ付ク。

猪・射
猪ヲ射ル
去来
去サル来ル

此ハ本文訓ナルユヘ真字ノ傍ニ音ヲ付ク。
尚本文ニ託近キ訓ヲ又下ニ付ク。余モ此ニ准知ルベシ。

一 音訓トモ仮名ノ取違易キ字仮令ハ

光 香 蠟燭
光カウ 香カウ 蠟燭ろうそく 符ほうき

此等ノ類ハ両方探索ベシ。

一 和字ハ日本ニテ作りシ文字ナレバ訓ニテ音ハナキナリ。仮令ハ
辻 躰 掬 榊 此等ノ類ナリ。

編者について、奥付には「尾陽乾山之臣 楽田高峙藏板」とあるが、詳細は明らかでない。序文の内容をそのままとれば、藩中の子女の教育の一助として編纂したものを出版するに至つたということになる。

凡例の第一項は一部を省略したが、内容は「文字引様」にあたるものである。

第二項では、真草二行の楷書体に付された両点の仮名を漢字の下におくか、右横におくかによつて、音か訓かを区別させることを述べている。方法はことなるが、音と訓を区別しようとすることは4の「万倍偶奇早引節用集」にもみられたものであり、共通の問題意識といえよう。

6 十三門部分 音訓正誤 いろは節用集大成 文化一三年（二八一六）序

我邦俗間所用之字書不為不多矣。然猶有未盡者也。余暇日点検群籍而輯録一書。目之曰求字捷徑。竊以為有助於兒童之需。唯恨余聞見未博考証亦疎。庶幾博学之士改而正之則幸甚。

文化十三年丙子季秋望

蕉州記

印 印

凡例

一此書は音訓の仮名数に随ひ其中の門部によつて文字を求む。門部の註文字の引様の例次に出せり。

一文字の下に「宛字」「会勾」「葉万」としるすは其書の中より撰みたる文字なり。

一真字の右に付たるかなは字音なり。下にあるは訓なり。

一近ころの字書とも多くはかなの文字数のみにてわかし門部なきゆへ混雜して文字を求るに煩し。此書は音訓のかな数を分ちその中の十三門部により文字を求る故捷徑なり。

一此書は經史尺牘の熟字をはじめ人家日用の俗語に至るまで要用の字を専らにあつめ字画音訓の誤りを正す。

凡例のあとに、「十三門部分註」と「文字引様」があるが、いずれも省略する。前者は、部門引きの節用集における門（乾坤・時候などの意義分類）の名称とその内容について説明したものである。

本書の特色は、凡例の第一項と第四項によつて知られるとおり、早引節用集でありながら、さらに意義分類を項目検索の手段として取り入れていることである。右に示した「十三門部分註」も、この検索法にともなつて必要になつたものである。

早引節用集の「早引」という項目検索法は、1の【新撰早引節用集】の凡例によつても知られるように、意義分類による検索を否定し、これにかわるものとして提出されたものであつた。

しかし、早引では仮名見出しの字数が四字になるグループに多くの項目が集中することになり、そのなかから求める項目を見つけたすことは、特に項目の増補をはかつた早引節用集では、てまのかかるものとなつていった。この問題を解消するために、本書はいったん排除した意義分類をふたたび早引節用集に取り入れている。本書は、享保二年（一七一七）刊の【和漢音積書言字考節用集】にもとづいたもので、簡便さや手軽さを主眼としたものではない。そのような近世節用集としての性格の違いも、本書が項目検索法として意義分類を復活させた要因の一つであらう。

なお、天保一三年（一八四二）刊の【十三門部分音訓正誤大全早字引】は本書の改題本であり、同文の凡例が付されている。天保一四年（一八四三）刊の【早永代節用集】も本書の改題本といつてよいものであるが、序文と凡例は改められている（次項参照。）

7 早永代節用集 天保一四年（一八四三）刊

記事実而如視往昔者文字也。隔千里而如為面談者亦文字也。雖有貴賤雅俗之別何可一日欠乎。抑積字成句積句成章可以通彼此之意矣。乃茲一巨冊中所收世間通用之名物言辭偶諺野語或正名異名本字俗字一言一句悉網羅焉。且以伊呂波之次第部類之。臨事當用索即隨

手得之。其捷徑便覽可謂左右逢源也。常置一部於座右而熟讀暗記則亦可以為博達之階梯也。古云登高者必自卑。覽者以鄙近勿棄云云

天保庚寅冬日北峰成題

凡例

一世に俗用文字の書多しといへども或ひは誤謬多く或ひは文字不足にしてその要用をなすもの鮮し。この永代節用集は世に所在雅俗の文字を集め且その引書を掲出して文字の出所を定にす。加之の一言にて乾坤人事官位服食等十三門に部を分たれば索むるに易く得に早し。世俗通用の字引に於てこの書の右に出るものあらじ。

前項に述べたように、「十三門部分（音調正誤）いろは節用集大成」の改題本である。凡例のあとに「十三門部分之解」があるが、省略する。明らかな改題本でありながら、あらたに序文を作り、署名をしている。奥付には「東都 山崎久作著」とある。山崎久作は山崎美成で、序の最後にみえる北峰はその号である。山崎美成を編者とする近世節用集は、ほかに嘉永二年（一八四九）刊の『増字 早引節用集』（扉に「早引字会節用集」とある）と嘉永七年（一八五四）刊の『早引通字節用集』があり、いずれも山崎美成による序が付されているが、実質的にどのようにかかわっているのか、本文の検討をふまえたうえで明らかにしなければなら

ない。

8 引 万代節用集 嘉永三年（一八五〇）刊

万代早引節用集序

古昔于軒轅氏之世有蒼顛者。於野視禽趾之紋而始製其形。今日古文字是也。有当时天雨粟鬼夜哭之異矣。是其後世将有懼因文字成大功及巨害故焉。以此見之文字有大功益哉殊金勝珠實可謂万世之至宝。先人既自有此類之集至于今為天下衆生理益。依年々行于世字書蓋盛而至若此書大冊成以作中野鄙上之益矣。

嘉永二年己酉四月

宮田彦弼識

凡例

近世追々文学盛なるによりて、俗用文字の諸書多しと雖、や、もすれば誤脱沢にて、俗上必用の文字書脱すこと、決て多く、湛て其用に備ふるに足らず。今やこの万代節用集は世にありとあらゆるガ、ソクヒツヨウ、モンジ、アツ、キンシヤク、カク、カミカズベ、ヨチヤウ、タイシシツウ、ホ、ムリヤウ、キタイ、タイセイ、ジサツ、紙数凡て八百余張大新增補、無量稀代の大成字冊といふべし。しか

も一声二声の訓をもて以呂波の教引とし其内にて天地人神仏官位衣食等に至るまで、分つに十有五の門部をもてしたれば、いよりすに至りて、文字の数幾百万なる事を知らずと雖、当用の文字を忽に引出すこと至て易く、誠に古今字引の冠たるものにして有益はかりがたかるべしといふ。

へ十五門部分之解へ文字引様心得へ教引之弁があるが、いずれも省略する。

凡例にあるとおり、6の「十三門部分 音調正誤 いろは節用集大成」などと同じく、早引と意義分類を併用している。項目数は六万をこし、近世節用集のなかでもっとも項目数の多いものである。

9 早引万宝節用集 嘉永六年（一八五三）刊

凡例

古代よりの節用集は皆博学宏才の作にして万世の今に至まで重宝となれり。しかるに後世増補益して謬誤多端なり。又仮名遣錯乱し却て惑乱のもとひとなる事すくなからず。今撰むこの万宝節用集は乾坤草木等の部をわかつては索閱事遅々にして不便なるが故にいろはにより仮名数をもつてひきだし急便に備へんのみ。且は仮名づかひを第一としてたしかなる文字をあらび童蒙の一助にもならんと

云爾

嘉永壬子新刻

仮名用格檢字

いゝ 伊勢・石清水・筏・威勢・位階・印判・ろ・楼上・籠
居・は・保養・坊舎・報恩・傍輩・ほ・鳳凰・奉公・豊年・
謀略・へ・苗裔・表具・俵物・漂泊・と・東西・頭人・
童子・同心・灯笼・豆府（省略）

先行の近世節用集の内容に誤りが多く含まれているということとを述べるのは、近世節用集の序文によくみられるところであり、そのなかでも仮名づかいへの言及は多い。ただ、先行節用集の仮名づかいの誤りは指摘しても、凡例等に何らかの標準的な仮名づかいが示されることはないし、節用集本文において仮名づかいを一定しようという明確な姿勢が実際に示されることもないように思われる。

本書が「仮名用格檢字」として頭字ごとに仮名づかいが問題になりそうな語を具体的にあげて、その仮名づかいを示しているのは、近世節用集のなかでは異例に属するものであり、凡例に述べられている「仮名づかひを第一」とすることの反映といえよう。ただし、本文において仮名づかいが先行の節用集とどの程度ことなっているかは確認が必要である。

真草早引節用集序

夫節用集ノ精キモノ、合類ヲ以テ最大一トス。然レドモ冊数多ク、且乾坤十三門ニ部類ヲ頒テ編タレバ或ハ乾坤ニ属スルカ、或ハ器財ニ属スル乎、疑ハシキモノ非ザルコトナシ。然レバ童蒙コレニ惑ヒテ、不便ナリト思フモアルベシ。因テ今此小冊ハ乾坤時令ニ拘ハラズ、引キ用ウベキ文字ノ音訓、其数ヲ以テ引シムレバ得ルニ甚易シトス。此類モ亦世ニアルモノカラ、迂遠ノ文字ヲ掲ゲ出シテ、猶煩ハシキ姿アレバ繁キヲ省キ少ナキヲ補ヒ、但当用ノ弁利ヲ旨トス。尤傍ニ真字ヲ付シテ、文字ノ本体ヲ明カナラシム。然ルニ文字音訓トモニ、仮名遣ノ法則アリテ、古代ハ是ニ差フハアラネド、近世ハ稍限ニシテ、開合ノ音ニ合ス。因テ今改メント欲スレドモ、童蒙常ニ謬ニ馴テ、却テ不便ト思ハンヲ恐レ、暫ク俗ニ从ヒテ、音訓ヲ巨細ニ訂サズ。大方ノ君子杜撰ナリト、嘲ルコト勿ランヲ請フミ。

瓜生政和記

印 印

凡世にある所の節用集、おのゝ俗の便利を旨として、仮名づかひいとみだりなり。今この書を編に至り、古書にこれを考へ訂して、仮字を正しくなさんとせしが、己慮るに、固より俗書なる

ものを、仮字を正すに至りては、或ひはきやうをけうとなし、ちやうをてうとなすの類ひも多く、看る人却て需むるに、倦むことを恐る、により、いゝゑをの仮字ちがひは、今更に改めず。さればををわうとなし、かうをこうと出すもあり。これその俗に従ふといへど、たゞ大人の嘲を慚るのみ。

《文字引様の例》があるが、省略する。編者、瓜生政和は、戯作者として知られる梅亭金鷲である。

節用集が《俗の便利》を旨とするものであること、したがって仮名づかいについても、何らかの基準によつて統一することがかえつて不便になるおそれがあるので改めないことを明言している。これは、てまのかかることをしないための口実とみられなくもないが、一面では、これが正直なところでもあつたであらう。

11 早引通字節用集 嘉永七年（一八五四）刊 国立国会図書館

（亀田文庫）

字学は文士の先務にこそあれ。今民間日用に於ては、節用集こそ、雑字の最便なるものといふべし。これや一日も闕べからず。近來猶そのますゝ便ならんことを、おもひはかりて、門部を改め、言葉の数にて次第を分つ。か、れは筆を採り紙に臨み、搜索頗速

にして、かつて暗記の失あることなし。そもく節用集はもとより俗字俗語のみ。其書出て已に幾年の星霜を経るまゝに、魯魚の訛すからず。一盲衆盲をひくの弊なきことあたはず。よつて俗字は俗字のまゝ、その字画を正し、俗語は俗語のまゝ、その訛言を改めつ。其中にはいかゞとおもふ文字もなきにはあらねど、有来しを略きては、事足らぬ心地すれば、其まゝにおきつ。さてその音訓のかなつかひは、ことに正くしたれば、うゑの座右に備へんも、又その益すからずと云。嘉永四年かとの亥の歳、春やよひ十日あまりこのかの日、山崎美成する数。

董斎正祐書

凡例

一此書引やうは、音と訓との仮名の数によりて、尋ね探るべし。たとへば（省略）。

一左の傍に、毎字真字を付く。但し一行に同字は省く。

一音と訓との分ち易からんために、音に唱ふる詞は、字の傍に訓を付け、訓によめるは音をしるす。たとえば

意 意 意
為 為 為
威 威 威
勢 勢 勢

これは本文音なるゆゑに、真字に訓をつく。

猪 猪 猪
射 射 射
去 去 去
来 来 来

これは本文訓なるゆゑに、真字に音をしるす。
一音訓とも仮名の取ちがひ易き文字多し。

ゆう・よう・えう・

おう・をう・あう・

くわう・かう・こう・

じ・ぢ・ づ・ず・

これらの仮字づかひは、正しくしたれば、幾ところも尋ねみるべし。

一和字とて字引になき文字あり。辻 躰 扱 榭 これらの字には訓ありて音なし。

〈凡例〉第一項の省略箇所は、〈文字引様〉にあたるものである。

編者は7の『早代節用集』と同じく、山崎美成である。序文において、〈節用集はもとより俗字俗語のみ〉と断じている。10の『真草数引節用集』でも節用集は〈俗書〉とされていた。節用集を〈俗〉とするこうした傾向は、幕末に近づいて顕著になるように思われる。

〈凡例〉は、部分的に改められてはいるが、5にあげた『世用早引大節用集』の凡例によっていることは明らかである。